

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所

〒220-8739 横浜市西区みなとみらい 4-5-3

神奈川大学 みなとみらいキャンパス 11 階

Tel 045-664-3710 (内線 4100)

ドイツの学校における「プロジェクト」活動との出会い

望月 耕太

私は数年前より仕事において目指していることがあります。それは、教育者を育てることを通して、より良い社会にしていくことです。このように考えるようになったきっかけは、数年前のドイツへの訪問調査でした。

私の専門は教育学です。教育学の中でも、小学校や中学校の教師のための教育に関わる教師教育という領域に関心があり、その教育方法や教育内容、教師の成長の過程に関心を持って研究に取り組んでいます。もともと教育学は、様々な学問をルーツとして発展してきました。そのうちの1つに哲学があります。先輩の研究者には哲学に歴史のあるドイツやドイツ語を学んだ方が多くいます。また、かつての教育学系の大学院の入試にはドイツ語が課せられることもありました。しかし、私は教育学を学びつつも、ドイツとの関わりが少ないまま学生生活を過ごしてきました。

2018年に共同研究を行う先輩研究者からのお誘いで、ドイツの訪問調査に参加する機会を得ました。現地では、同行した方の「現地の教育を知るためには、そこで生活をしている人の文化や環境を知る必要がある」という言葉を受け、時間があれば近隣を散歩して様々なものを見て回り、現地のものを食すようにしました。街並みがとてもキレイで、ビールはもちろんのこと、コーヒーがとてもおいしかったことを覚えています。研究としては大学や小中学校など様々な教育機関に訪問し、施設見学をしながらインタビュー調査を行いました。そこで印象的だったことは、ある学校での「プロジェクト (projekt)」と呼ばれる教育活動です。生徒と教師が協力しながら世の中の課題や社会問題を解決しようと、話し合ったり実際に街に出て現状を調査したりする活動です。「プロジェクト」はドイツ国内において1960年代から広がったと言われていきます。「プロジェクト」は多くの場合、教師と生徒は任意参加です。訪問した学校では、終末期医療や路上生活者などをテーマに活動していました。日本においても「総合的な学習 (または探究) の時間」という授業において、こういったテーマを扱う学校がありますが、命にかかわるテーマは避けられることも少なくありません。しかし、ドイツで訪問した学校では積極的にこういったテーマを取り上げていました。ドイツの生徒たちに「プロジェクト」に取り組む理由を聞いたところ、世の中で課題になっていることについて、自ら追究したいからとのことでした。私はこの回答に対して、ドイツの子どもたちの社会に対する当事者意識の強さを感じ衝撃を受けました。日々の生活で精一杯になっていたその時の自分を見直し、社会における自分の仕事の役割や意味を考えました。今では、自分の



訪問調査したフランクフルトの学校 (Ernst-Reuter-Schule 1)
Ernst-Reuter-Schule 1 のホームページのトップページにある画像を
筆者が加工しています。

<https://www.ers1.de/> (2022年12月8日確認)

仕事の意義は、教育者を育て、より良い社会に貢献していくことだと考えています。

とは言いましても、日々の仕事で一喜一憂したり、家庭と仕事との両立に悩んだりと目の前のことに精一杯な自分がありますが、そんな私も社会を担いより良い

方向に進めていくための一員であることを忘れず、世の中の課題に向き合っていきたいと思います。将来の社会を担う学生に関わることができる仕事にやりがいと誇りを感じています。

(所員/もちづき・こうた)

ビジネスプランコンテスト開催報告

大田 博樹

2022年10月29日(土)、経営学部主催の「第17回ビジネスプランコンテスト」がみなとみらいキャンパスの米田吉盛記念ホールにて開催されました。コロナウイルス感染症対策のため本年度も無観客での開催となりましたが、昨年と同様にコンテストの様子はYouTubeによりライブ配信されました。

今回のビジネスプランコンテストでは、12チームの参加がありました。各チームの持ち時間は15分、その後の質疑応答が10分。審査員は平塚信用金庫から中小企業診断士でもある井萱誠様と吉田一幾様のお二人と経営学部から行本先生と尻無濱先生の計4名。司会は昨年に続き田中則仁先生です。



審査基準は、①ビジネスやマーケット等の新規制や独自性といった事業内容の評価と②財務計画や事業運営の実現可能性といった経営能力・実現可能性の評価、③表現力や質疑応答の能力に対する評価、そして④ビジネスの社会的重要性の4つのパートから構成されています。4つめの社会的重要性については、今回新たに追加された審査項目です。

今年の受賞チームは次のとおり。

最優秀賞 花咲か爺さん「Re bloom」

平塚信用金庫理事長賞

PLoud BLUE「Link Hiratsuka」

優秀賞 cha★cha「ぎふたぶる」

奨励賞 #me「ワタシバコ」

奨励賞 起死回生「coco」

成績発表後には、各審査員からの講評がありました。行本先生からは「結果が出たチームもあれば結果につながらなかったチームもありますが、プロセスが大切。今日は反省しなくても良いので、明日以降、就活などに向けて良い花を咲かせてもらえれば良いと思います」と最優秀賞のビジネスプランの内容にかけたコメントがありました。また、平塚信用金庫総合企画部長の舛水陽二様からは「中小企業の資本金は平均して300万程度で、それをいかに有効に活用していくのが大切。その辺りを真剣に考えればもっと良いビジネスプランを考えられると思う。今回のビジネスプランを作る経験は学生にとって良い経験になったのではないかと」の締めコメントを頂きました。

ビジコン当日は10時から18時までの長丁場でしたが、参加した学生たちにとっては貴重な経験となったのではないのでしょうか。



(所員/おおた・ひろき)

コロナ禍でも夏まつり 非日常の経験をさせてあげたい！

石濱 慎司

2022年夏、収束するかと思われたコロナ感染が、第7波の拡大により様々なイベントや飲食関連が自粛の雰囲気になってきました。私の住んでいる東京の田舎でもそれは同様であり、子どもたちの学校行事は、運動会や発表会など縮小や中止となりました。子どもの頃の思い出は大切であり、我々おとなたちは誰もが皆、ふるさとでの楽しかったシーンは頭に焼き付いているかと思います。今回は、「このままでいいのか？」と思い奮い立った、おとなたちのやりきったひと夏の思い出を振り返ってみます。

非日常の経験を

5月下旬、これまで2年間自粛していた「子どもまつり・盆踊り大会」の開催準備のための実行委員会が開催された。「現在コロナも収束しているので、今年は夏まつりを、感染対策を十分におこない、焼き鳥、焼きそば、アルコールなどの飲食なし、時短、コンパクトな開催を予定しています。」と子ども会のシンペイ会長がドキドキしながら宣言したが、開催反対の意見が出るかと思っていた。その後、お母さんたちが何やら相談をはじめ、「非日常の経験をさせたい。いくらコンパクトでも、まつりの櫓や提灯はあった方が雰囲気であるよね。」と、子ども会のお母さんたちからの一言。あれ、皆さんの積極的な賛成意見に実行委員のおとうさんたちはあっけにとられてしまった。

「よし、やるか！」

準備と心配ごと

「待てよ。今年はコンパクト開催のため、櫓をつくる予定なしで、おまけに3年ぶりの櫓たて、皆作り方を忘れてないか、電気も借りてないので提灯どうする、花掛けなしでお金がない」このような心配ごとからのスタート。

まず「櫓たて」は、この地域では珍しく木材を組み上げる工法であり、おまけに建築に携わる人は、皆近所のおとなたちで素人。設計図は、皆の頭の中にし

かない。櫓たての当日は、のべ20名以上のおとなたちが集結、お神酒のあと早速開始。「柱を立てる穴が小さい!」、「この木材こっちじゃないか?」、「ボルトが入らない!」などなど、皆の頭のなから設計図がどンドン飛び出してきた。とうとう2年間自粛していた、近所の会話が戻ってきた。2日間かけて完成した立派な櫓を見て、皆が口にしたのが「コンパクトではない・・・」

次に「電気がない!」いつもは5月の時点で夏まつりの開催が決定するため、この時点で電気設備工事をお願いしていたが、今年は申し込みができていないことが発覚。運がいいことに自動車販売店があり、そこには電気自動車が。ダメもとでお願いするが、なんとOKの返事が。自販店でも何か地域の活動に役に立てればというスタンスでいた。これで無事、提灯に明かりが灯る。



そして、花掛けなし、飲食なし、収入なしの無いない尽くし。どうする!? 商店街をまわって商品集め、その代わりに広告のデジタル映像化、カボチャとサツマイモを苗から育てて収穫。かなりの景品が集まり、これで人は呼び込めそう。

おまつり当日

心配していたことが開催当日におきた。主力のスタッフである太鼓の 마사、梨屋のヒデ、アイス屋のモリが濃厚接触で棄権となり、バタバタとなった。そして夕方4時、開始の予定時刻、お客さんがまばら。スタッフのお父さんたちの脳裏に「この時期に人が集まる

のか?」と。そして“キツネダンスフラッシュモブ風”が開催の合図。滑りまくった。しかし、徐々に人が、人、人、人。オート検温器も暑さでダウン。今年の出し物はいつもと違う。まずは、おかあさんたちの“ゲーム大会”、まずまずの盛り上がり。次に“バルーンアート”。徹夜で覚えた大道芸人ツヨシが壇上で来場者に得意げに披露し、子どもたちと一緒に作成。心配をよそに即席大道芸人が大盛況。200本以上用意したバルーンは、業務用エアコンプレッサーを使ってふくらませたが、一気になくなった。“みんなでダンス”は、子どもたちが振付を教えながらの「パプリカ」。おとなの予想に反してすごく盛り上がった。“必ずもらえる大抽選会”。商品はおとうさんたちが商店街から集めまくった野菜、干物、割引券など。そして大盛況のまま、“盆踊り”に突入。夜空



にきれいに提灯が連なった。最後は子どもたちの笑顔も“蛍の光”とともにあつという間の3時間半。偶然にも隣町から花火が上がりおひらきに華を添えた。夏まつりのご褒美かな。

この夏まつりは、IT、外資系、メーカー、農家、建築などさまざまな業種のおとうさんたち、町内会の重鎮と子ども会のおかあさんたちの集合体が、できない理由ではなく、やれる理由を探し、飲みにケーションから出たアイデアと工夫でやりきりました。終わってみれば地域の方々の応援もあり、お祝いも集まり黒字に。そして、10月下旬に景品のサツマイモ掘りもしました。これで地域が繋がるのも悪くはないですね。

夏まつり実行委員長 ハマー
(所員/いしはま・しんじ)

Column

3年ぶり！対面でのインターゼミナール大会開催

11月23日(水)第18回経営学部インターゼミナール大会が3年ぶりに対面で開催された。37チーム151人の経営学部生が8会場に分かれて研究成果を発表し、発表終了後には米田吉盛記念講堂に集まって表彰式が行われた。

初のみなとみらいキャンパスにおける対面での開催であったが、緊張感のある発表、歓喜にみちた表彰式を目の当たりにし、学生にとって人前で研究成果を発表する機会はとても大切ということを改めて感じた一日となった。(T)



国際経営研究所からのお知らせ

- ❖ **来年度共同研究プロジェクトおよび特別所員・客員研究員の募集**
2023年度開始の新規共同研究プロジェクトおよび客員研究員については1月中旬に募集予定
- ❖ **公開講演会**
公開講演会の開催案がございましたら国際経営研究所までご相談下さい。

- ❖ **国際経営フォーラム刊行**
国際経営フォーラム33号 12月下旬発行予定
- ❖ **国際経営研究所ホームページリニューアル**
来年1月中旬よりリニューアル公開予定
<http://iibm-u.kanagawa-u.ac.jp/>
国際経営学会のホームページも新規作成中
(来年2月下旬公開予定)